下沈式窑洞集落における中庭の配置パターンと 族居に関する考察

B. Rudofsky の空撮写真をめぐって

THE DISTRIBUTION PATTERN OF THE UNDERGROUND COURTYARD AND CLAN CONGLOMERATION OF THE PIT TYPE CAVE SETTLEMENT IN CHINA

Pivoting around a aerial photograph by B. Rudofsky

八代克彦^{*1}, 茶谷正洋^{*2}, 八木幸二^{*3}, 中澤敏彰^{*4}, 栗原伸治^{*5}
*Katsuhiko YASHIRO, Masahiro CHATANI, Koji YAGI, Toshiaki NAKAZAWA
and Shinji KURIHARA*

The Chinese cave dwelling was introduced to the world by Bernard Rudofsky in 1964. In his book ARCHITECTURE WITHOUT ARCHITECTS, which shows aerial photographs of pit type cave settlements, the distribution pattern of the underground courtyard is shown. The writer describes the pattern as the most rigorous, not to say abstract, design.

The objective of this paper is to examine the distribution pattern of the courtyard of the pit type cave dwelling. In order to achieve this goal, the relation between the pattern and the clan conglomeration which can be seen in Chinese traditional rural villages will be focused on.

Keywords : pit type cave settlement, B.Rudofsky, distribution pattern, clan conglomeration, boundary of lot
下沈式窑洞集落, B. Rudofsky, 配置パターン, 族居, 敷地境界

1. はじめに

中国の黄土高原では塬と呼ばれる平坦な台地が発達し、そこには居住空間を地下に求めた、いわゆる下沈式窑洞住居が普遍的にみられる。下沈式窑洞集落で住居の外形として視認しうるのは、地下に掘られた中庭とそこへ降りるためのアプローチのみであり、居室となる横穴は地下に存在する。

中国の窑洞住居については、B. Rudofskyによって図-1をはじめとする4葉の空撮写真¹⁾が世界の建築界に紹介され、その説明文で「穴居生活は必ずしも文化の低水準を意味するものではなく、(中略)中国の穴居集落は高度に洗練された建築になっている。(中略、特に下沈式窑洞住居については)地面に掘り抜かれた住居の中で最も大胆な形式は中国の黄土地帯における地下の街や村落であり、ここには抽象的とまでは言い切れぬにしても、それに近いような厳しい造形性が読み取れる。(中略、J. B. Cresseyの著作²⁾から引用して)このような土地は下は住居、上は畑というかたちで二重の機能を果たしてい

る。」と指摘している。

筆者らは、下沈式を含めた窑洞住居の諸類型が、中国住宅全般に共通してみられる中庭を核とする空間構成を、

図-1 B. Rudofskyによって紹介された下沈式窑洞集落の空撮写真

*1 東京工業大学 技官・工修

*2 東京工業大学 教授・工博

*3 東京工業大学 助教授・工博

*4 株式会社 無・設計工房

*5 総合研究大学院大学 大学院生・工修

Technical Official, Tokyo Institute of Technology, M. Eng.

Prof., Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.

Assoc. Prof., Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.

Mu-Sekkei Studio Inc.

Graduate Student, The Graduate University for Advanced Studies, M. Eng.

黄土を介して具現化した住居の一形式であるとの視点に立ち、1981年から現地調査を継続的にを行い、これまでに窑洞住居の実態とともに、中庭空間の地域的特徴を論じてきた。^{*)}

下沈式窑洞住居についていえば、地下に横穴がある場合、その真上の土地は農作業場として使われることはあっても、耕地としたり家屋を建設することはない⁴⁾、B. Rudofskyの先の指摘は必ずしも妥当とはいえない。

本稿の目的は、B. Rudofskyによって紹介された下沈式集落（以下、ことわりのない限り図-1をB. Rudofskyの集落⁵⁾と呼ぶ）に見られる、彼が指摘したところの「抽象的とまでは言い切れぬにしても、それに近いような厳しい造形性」の秘密を探ることにある。本稿では、その手段として、下沈式集落における中庭相互の配置パターンと、中国の農村集落においてみられる、宗族ごとに一定の居住区画に集居する「族居」⁶⁾と呼ばれる現象との関係について考察する。

2. 分析対象

下沈式窑洞集落の現地調査は、図-2に示す9地区11集落（洛陽のみ3集落）で行った。これらの集落の規模や調査内容にはばらつきがあるため、本稿の目的に沿い、次の2段階に分けて分析を行う。

まず、第一段階では、下沈式が分布する黄土高原の南部全域を視野におき、現地調査を行った下沈式集落のうち、中庭の数が50坑以上ある、陝西省淳化县十里原郷梁家庄村、河南省靈宝県焦村郷西章村、河南省洛陽市邙山郷冢頭村の3集落（以下、淳化、靈宝、洛陽と呼ぶ）を主な分析対象とする。これらの3集落では調査内容につ

いても中庭の開削年代および居住者の姓について悉皆調査を行っている。

これら3集落の選定が地域的に妥当か否かについては、下沈式の中庭空間の地域的特性についての既報⁷⁾でも述べたように、外観上の特徴によって下沈式の分布地域を分けた場合（図-2）、3集落はそれぞれ西部、東部、両者の境界地域の典型的な下沈式集落といえる。中庭の配置パターンとの関連で言えば、黄土高原の西部では家族の成長や結婚を契機に徐々に中庭を拡張するのに対し、東部では中庭開削時に規模が固定される。3集落のうち、淳化は西部、洛陽は東部に属し、その中間に位置する靈宝については外観上は西部に属するものの、中庭を固定する措置など東部の特徴もうかがわれる。

第二段階では、B. Rudofskyの集落を主な分析対象とする。まず、当該集落の所在地とされる河南省西北部の黄河南岸⁸⁾近辺の下沈式との類似性を検討し、次に、この地域の現地調査で得た実測図と図-1の写真から、当該集落の中庭の配置パターンをモデル化したうえで、成立過程などについて考察するものとする。

3. 分析方法

3.1 配置パターンのモデル化

下沈式窑洞住居の中庭は、一般に矩形を呈し、その各辺は東西南北にはほぼ正対している。そこで本稿では、図-3に示す手順にしたがい中庭の配置パターンをモデル化する。

まず、図-3.1に示すように、各中庭の位置を●（矩形の中庭の内部にできる対角線の交点）で表わし、隣接する中庭同士を実線で結ぶ。実線によって矩形ができる

図-2 窑洞住居の分布と調査地

3.1 中庭相互の位置の表示

3.2 座標平面の設定

図-3 中庭の配置パターンのモデル化

場合（例えば、四角形 $P_1P_2P_3P_4$ ）、対角線が2本（ P_1P_3 と P_2P_4 ）ひけるが、ここでは中庭相互の位置関係として周長のなるべく短い三角形からなるネットワークを想定し、短い方の対角線（ P_1P_3 ）を実線で結ぶ。すなわち、ある1点の配置を決定する際、より近い点との位置関係が考慮されるものと仮定し、 P_1P_3 は P_2P_4 よりも距離が短いことから考慮の度合いが高いとみなし、これを実線で

結ぶこととした。

次に、図-3.2のような、横軸を東西方向、縦軸を南北方向とした座標平面を設定し、中庭の各点を順次この座標平面の原点に置き、実線で結ばれた周囲の点をプロットしていく。すなわち点 P_1 を原点に置いた場合は点 P_2 、 P_4 、 P_6 の計3点が、また点 P_6 を原点に置いた場合は点 P_1 、 P_2 、 P_3 、 P_4 、 P_6 、 P_8 、 P_9 の計7点が座標平面上にプロッ

4.1 淳化县梁家庄村

4.2 靈宝県西章村

4.3 洛陽市冢頭村

図-4 3集落の配置図（同一縮尺）

トされる。図-3.2の例でいえば、点の配置状況から、格子状の配置パターンを読み取ることができる。以下では、図-3の座標平面上に現れるネットワークの形状をもって配置パターンと呼ぶ。

3.2 族居率の設定

第1章で述べたように、中国の農村における住居配置の特徴として、ひとつの集落が複数の宗族によって構成される場合、異なる宗族が混住することはない、一定の区画に同じ宗族すなわち同姓の家族が集居する現象があげられる。中国語ではこれを族居と呼ぶ。本稿では、中国語をそのまま採用し、族居の度合を示す指標として、一定の区画において、最多姓の占める割合を族居率⁹⁾とした。

4. 考察

本章では、中庭の配置パターンが時代とともにどのような変容を遂げているかをみるために、族居率と中庭の掘削年との関係のなかで考察する。

4.1 悉皆調査を行った3集落について

淳化、靈宝、洛陽の3集落について、隣接する中庭を実線で結んだ集落配置図を図-4に示す。

以下では、まず、図-4をみながら3集落の族居の状況を集落の形成過程¹⁰⁾とともに概観する。

淳化は住民のほぼ100%が任姓からなり、渭河の一支流小花溝を西に臨む黄土崖を起点に集落が東に向かってスプロールしている。こうした集落の形成過程を傍証するもののひとつに集落内道路の名称があげられ、集落の中心を表す正街里が、現状では集落西側に位置し、ここを起点に東正街、北街、上北街へと道沿いに集落が拡張してきたことがうかがわれる。

靈宝では集落中央を東西によぎる2本の道、すなわち馬道胡洞、賀家胡洞¹¹⁾を起点に集落がスプロールした傾向がみられる。しかしながら、時代的に後のもので中庭相互の僅かな空き地を利用して開削したものもあり、新旧の中庭が密に配されることが同集落の特徴といえる。また、同集落では最多姓である呂姓が全体のほぼ半数にとどまり、王、張、賀などの宗族と混住するものの、異姓同士の中庭が隣接する場合は地上に土塼を築くことで敷地境界を明確にし、これによって族居が行われている。

洛陽では集落の中央部に瓦屋根の家屋群がみられ、その周辺に下沈式の中庭が散在する。同集落の旧時の主要道は、家屋群の中央を東西に貫通する中心街であったが、1937年に洛陽と黄河南岸の横水を結ぶ洛横路が開通したことにより、1949年の解放後は洛横路以南および以西へと集落がスプロールした。また近年では、下沈式窑洞から地上の煉瓦造の家屋への移り住みが顕著であり、1991年時で使用中的下沈式の中庭は10坑にみえない。同集落は陳、張、鄭、杜の4大宗族からなり、解放前の居住区である洛横路以北では、宗族ごとに居住区が分けられて

いるのに対し、解放後になると人民公社の指導のもとで敷地割当が行われ、これとともに族居が解体する傾向が認められる。

図-4において実線で結ばれる中庭群をひとつのグループとして、図-5に、各グループの族居率と中庭開削年との関係を示す。図中で縦線の右にのびる棒グラフはその年に開削された中庭の坑数を示し、開削年が不明確なもの¹²⁾については、縦線に沿ってその左側に各時代ごとの坑数を示した。なお、中庭群が密に配される靈宝のAグループについては、2本の道で細分化した3グループ(a1、a2、a3)についても併示した。

図-5より、各集落の族居率は概ね淳化、洛陽、靈宝の順に高く、中庭の開削年すなわち下沈式集落としての古さは洛陽、靈宝、淳化の順に古いことがうかがわれる。

次に、図-5の各グループの中庭の配置パターンを図-6に示す。図-5と図-6において各グループ相互の位置関係は対応している。また、図-6では、各グループの敷地境界が、宗族ごとすなわち異姓同士が隣接するときにみられるものを▲、各中庭ごとにみられるものを■で示した。

図-6より、中庭の配置パターンの時代的傾向として、中庭開削年が新しいものほど、族居率が低くすなわち異姓同士が混在する度合が高くなり、なおかつ、点のばらつきが小さくすなわち敷地規模が画一化してくることが読み取れる。また、敷地境界についても、開削年が新しいものほど、宗族ごと(▲)から各中庭ごと(■)へと敷地割が細分化する傾向がみられる。しかしながら、図-6で点の分布状況から中庭の配置パターンを読み取れるのは、わずかに淳化Bの線パターンと淳化CおよびDの格子パターンだけであり、靈宝a1およびa3、洛陽DおよびEなどは、淳化よりもむしろばらつきが小さくなるにもかかわらず、配置パターンを判断しかねる。

ここで、配置パターンを読み取れる淳化B、C、Dについて図-4でその敷地形状をみると、いずれも南北に縦長の矩形であり、敷地境界は境界上に植えられた樹木や、敷地を囲む耕地によって明示されている。中庭の配置パターンを判断しかねる靈宝a1、a3や洛陽D、Eについても、図-6をみると、やはり南北に長い矩形の敷地境界を確認することができる。そこで次節では、B. Rudofskyの集落を考察する前に、中庭の配置パターンと敷地形状との関係を検討しておく。

4.2 中庭の配置パターンと敷地形状の関係

図-1のB. Rudofskyの集落のような広範囲の平坦地に、下沈式窑洞を効率的に配置する場合、その敷地形状を正多角形で考えると、図-7に示す、三角形、四角形、六角形の3つがありうる。中国において自己のテリトリーをイメージさせる形状は、大は天円地方で表現される地上世界から、都市レベルでは、城郭、街区、さらに北京

図-5 3集落の族居率と中庭開削年との関係

図-6 3集落の中庭の配置パターン (グリッド1目盛は20m)

四合院に代表される住宅の敷地割に至るまで四角形であり、なおかつそれは東西および南北両方向に線対称な矩形であった。中国語ではこうした都市レベルでの配置構造¹³⁾を「布局」または「格局」と表現し、これらの語はまさに図-7の正方形の格子を連想させる囲碁に由来するとされている。

そこで次に、仮に正方形を敷地形状とし、図-8に、考える配置パターンを示す。図-8で方位は上方を北とする。格子パターン(G型)をもとに、まず、東西および南北方向にずらした六角形パターン(Ha型、Hb型)が考えられ、さらにそれぞれ配置が密になると、敷地の周囲に重複のあるg型、ha型、hb型が考えられる。敷地の重複部分は隣接するもの同士との共有空間であり、それまで塀や樹木などによって明示された敷地境界が消失してしまうことが考えられる。このような共有空間の出現にともなう敷地境界の消失という現象は、血縁関係のある宗族内で起こり得る可能性が大きいと考えられる。

ここで、中庭の配置パターンと、中庭空間を経年的にみた場合の地域性、すなわち西部=拡張型、東部=固定

型との関連で言えば、次のことが考えられる。西部のように、家族人数の増加にともない中庭を拡張し、これにともない横穴も掘り進んでいく場合、格子パターンでは隣接する中庭の横穴同士が接近し、ついには連結してしまうことが考えられる。一方、六角形パターンでは、南北あるいは東西のどちらか少なくとも一方向については、これを避けることができる。ゆえに、西部では六角形パターンが採用される可能性が高いといえる。

ちなみに、西部と東部の他の調査事例をみると、図-9は甘肅省西峰鎮の例であるが、同集落周辺は市街化が急激に進行しつつあり、下沈式ははわずかにこの5坑だけで、周辺には、窖洞を切り崩して整地したあとに建設された家屋群が立ち並ぶ。その配置パターンは、点の数は少ないものの、六角形パターンとみることができる。なお、これらの下沈式は調査時(1981年および1984年)において一部が公営住宅として使用されているが、開削年は解放前と言われ、矩形の敷地境界を明示できないほどに中庭同士が接近していることから、かつてはひとつの宗族によって所有された区画、すなわち六角形パ

図-7 正多角形による敷地形状のパターン

図-8 中庭の配置パターンと敷地形状の関係(方位は上方が北)

図-9 甘肅省西峰鎮の調査事例
(グリッド1目盛は20m)

図-10 河南省鄭州の調査事例(グリッド1目盛は20m)

ターンhb型の残存部分と考えられる。

一方、図-10は河南省鞏県における調査事例であるが、同集落の下沈式窑洞住居は1963年前後に人民公社の計画に基づきいっせいにつくられた集落であり、土塬によって敷地境界が明示されていることから、その配置パターンは格子パターンのG型といえる。

本節のこれまでの考察を念頭に、先ほど図-6で配置パターンを判断しかねた霊宝a1、a3、洛陽D、Eについて、格子パターンまたは六角形パターンのどちらかとみなす方針で再度検討すると、霊宝a1は六角パターン、霊宝a3は格子パターン、洛陽Dは格子パターン、洛陽Eは六角パターンとみなすことができる。さらに敷地境界の有無をみると、洛陽D、Eでは植樹によって四角形の敷地境界が明示されていることから、それぞれG型、Hb型とみなすことができる。一方、霊宝a1、a3については、宗族ごと、すなわち同姓ごとの敷地境界は東西または南北方向の土塬によって明示されているが、同姓同士の敷地境界は明示されていない。すなわち霊宝a1の六角パターンを例にとると、異姓間ではHa型、同姓間ではha型が成り立ち、これらが並存することが配置パターンの判断を難しくしていると考えられる。霊宝a3についても、格子パターンのG型とg型が並存するものと考えられる。

なお、六角形パターンのうち、-a型か-b型どちらを採用するかは、集落内道路との関係によって、東西方向の道の近くにある場合（霊宝a1）は-a型、南北方向の道の

近くにある場合（洛陽E）は-b型になると考えられる。

4.3 B. Rudofskyの集落について

これまでの調査から、平坦な地勢ではアプローチは一般に中庭の南東に配される傾向¹⁴⁾が認められ、これと図-1の日差しの向きから判断して、図-1は当該集落を北方上空から空撮したものと考えられる。さらに、図-1で画面が比較的鮮明な手前2列の中庭を見ると、南壁面には3穴の横穴が穿たれ、そのうち東寄りの1穴は巾が狭く、アプローチを降って中庭へ出る手前の過洞と呼ばれるものであることがわかる。このような形式のアプローチは、図-2の地図上では、果たして、西部と東部の境界地域の3調査地すなわち霊宝、三門峡、平陸において確認された。しかしながら、図-1に見えるような、L字型のアプローチが中庭の南壁面東隅にとりつき、しかも南壁面に横穴が3穴穿たれる平面構成は、図-1の集落の所在地とされる黄河南岸ではなく、黄河北岸の平陸の下沈式集落で多くみられた。

そこで、図-11.1の平陸での実測調査例（中庭の1辺の長さ13m）をB. Rudofskyの集落（図-11.2）のグレーで示した中庭に適用し、グリッド化を行い、さらにこれを補正して中庭の配置パターン（図-11.3, 4）を求めた。

図-11.4から、B. Rudofskyの集落では六角形パターンが認められ、なおかつ、当該集落では地上レベルにおいて敷地境界が見えないことから、隣接する住居との共有空間を敷地周囲に有するha型とみなすことができる。な

11.1 山西省平陸の実測例
(1969年開削)

11.2 B. Rudofskyの集落(図-1)のグリッド化(方位は下方が北)

11.3 グリッドの補正
(1目盛13m)

11.4 中庭の配置パターン

11.5 配置パターンと平面との対応関係

図-11 B. Rudofskyの集落の中庭の配置パターン

お、この共有空間すなわち敷地の重複の様子については、図-11.1の平面図と図-11.4の配置パターンを重ね合わせた図-11.5によって見る事ができる。¹⁶⁾

ここで、敷地境界の有無と族居率との関係を見るために、平陸の集落を例に検討することとする。

平陸の集落(図-12)は、敷地境界が明確でない東北部Aと、植樹によって敷地境界が明確な西南部Bとに分けることができる。ゆえに、それぞれの中庭の配置パターンは、Aは六角形パターンh a型、Bは格子パターンG型とみなすことができる。同集落でのヒヤリングによれば、グループAは解放前に住民が自発的に掘削したものであるのに対し、グループB¹⁷⁾は1960年代後半に人民公社の指導のもと計画的につくられたものであるという。族居率については、図-5および6で、年代が古いものほど高い傾向が確かめられており、これを前提とすれば、開放前のグループAはグループBよりも族居率の高い、すなわち単一の宗族からなる度合の高い居住区画であると考えられる。

以上の考察を総合すると、B. Rudofskyの集落は、平陸Aと同様、敷地境界が地表に現れない六角形パターンHa型であることから、単一の宗族からなる度合の高い集落であることが推察される。

5. まとめ

本稿では、中国の農村集落においてみられる、宗族ごとに一定の居住区画に集居する現象、すなわち本稿でいうところの族居に着目し、居住空間を地下に求めた下沈式窑洞集落における中庭の配置パターンを検討した。

その結果、下沈式窑洞集落においても族居という現象が認められ、これを時代的にみると、中華人民共和国成立後、族居は徐々に解体し、行政指導により姓の異なる家族同士が隣接して住まうようになり、これにともない地上レベルでは各戸の敷地境界が土塀の建設や植樹などにより明確になる傾向が確かめられた。

また中庭の配置パターンは、格子パターンと六角形パターンの二つに大別でき、両者とも、単一の宗族からなる度合いが高く配置が密になると、隣接する住居との敷地の重複すなわち共有空間が生まれ、敷地境界は消失すると考えられる。こうした敷地境界の消失は調査範囲内では、六角形パターンについて確認された。なお、六角形パターンは中庭の拡張にも対応できることから、黄土高原の西部の下沈式に適した配置パターンといえる。

以上の考察をもとに、B. Rudofskyの下沈式集落について検討した結果、同集落が敷地境界のない六角形パターンを呈することから、計画的に建設された族居集落であると推察される。すなわち、B. Rudofskyの指摘した「抽象的とまでは言い切れぬにしても、それに近いような厳しい造形性」とは、敷地境界の消失をもたらした、宗族という血縁のネットワークを言い表したものである。

図-12 平陸の中庭の配置パターン
(グリッド1目盛は20m)

注

- 1) 文1)参照。文1)は、1964年9月から翌年2月にかけてニューヨークの近代美術館(the Museum of Modern Art)で開催された展覧会<Architecture Without Architects>を機に出版されたものである。そこに所載された窑洞集落の写真4葉の提供者は、1933年から3年間、中国に郵便飛行のパイロットとして赴任したW.D. Castell伯爵であり、同氏は中国での空撮写真を文2)の写真集にまとめている。
W.D. Castell伯爵(1980年没)は、中国滞在中に撮影した写真のネガ・フィルムおよび16mmフィルムをミュンヘンの国立民族学博物館 (Staatliche Museum für Völkerkunde)に寄贈しており、筆者らは1988年7月に同博物館を訪問したが、文1)の4葉の写真(3葉が陝西省潼関付近、1葉が河南省洛陽付近)と文2)の5葉(2葉が潼関の南、2葉が河南省陝州の南約30km、1葉が陝西省武功)以外、特に図-1の集落についての新たな資料は得られなかった。
なお、図-1のみ、文献1)および2)に掲載されているが、その所在地の記述には食い違いがある。このことについては注8)参照。
- 2) 文3)参照。
- 3) 文4)~6)参照。
- 4) 横穴の真上を畑(小麦、アブラナなど)として使用しないことの原因として、作物の根が土壌を攪拌して水の浸透をまねき、横穴の安全性を脅かすこと、また地上家屋を建設しないことについては、地下に横穴すなわち空洞があり、基礎地盤として十分な地耐力が期待できないことが住民によって指摘されている。

- 5) 文1)および文2)に掲載された計8葉の空撮写真のうち、前掲注1)でも指摘したように、図-1のみ両文献で扱われ、しかも中庭およびし字形のアプローチの配置パターンや、中庭に穿たれた横穴をはっきりと視認し得ることから、この写真を中心に分析を行うこととした。
- 6) 文7)参照。本書は、文化大革命時に4年半にわたって農村への下放を経験した著者が、中国社会の理解には人口の8割を占める農村社会の伝統的組織と特徴を理解することが不可欠であるとし、1988年と1989年の2度にわたって、中国全土から15の村落を任意に選択し、宗族を中心に農村の社会関係を総合調査したものである。族居については、革命以前の宗族の組織形態を扱った「第2章 構造」の第2節で詳述されている。なお、本稿では族居について、第3章の分析方法でも後述する。
- 族居については、日本人研究者によっても指摘されており、族居という用語は使われていないものの、例えば、文8)では、「第3章 村落社会の特質」で、「同族村落か異姓混淆村落かによってその社会的性質が相違することは言うまでもないし、等しく異姓混淆村落であっても、その混淆の度合、即ち二三の有力同族からなる村と多数の姓が混在する村等によって差異が生ずる。(p.78)」としている。また文9)の「第2章 華北農村の同族的結合と同族規範」では、族居という現象を中国全土でみた場合、「同姓村落(同族村落・・もっとも同姓必ずしも同族ではない)をはじめある限られた同姓の圧倒的多数を以て構成される村落、つまり同姓の比重の大きい村落は、清代又は近來の状態からいえば華中華南殊に華南の農村に多いとされている。」としている。
- 7) 文5)の、主に、表-1(下沈式窑洞住居の中庭空間の呼称と外観上の特徴)および、図-16(下沈式窑洞住居の中庭空間の経年変化モデル)を参照。
- 8) 図-1のB. Rudofskyの集落の所在地を、文1)では潼関付近としているが、文2)では陝州(現在の陝県。三門峡の北西、黄河南岸)の南30kmとある。1989年10月、潼関での調査で現地政府に図-1の写真を示し、その所在を確かめたところ、このような下沈式の集落は潼関付近にはないとのことであった。また実際にこの付近を車で通過した際、下沈式が穿たれるような平坦な地貌は見あたらなかった。靈宝は三門峡の南西約40kmにあり、両地点間で比較的多くの下沈式集落を実見したことから、図-1の下沈式集落はこの付近に存在するものと推測される。なお、潼関は陝西・河南山西3省の省境、陝西省側に位置するが、文1)では河南としており、文1)の撮影地点については信憑性に欠ける。
- 9) 文7)の「第2章 構造」の「第3節 宗姓」では、15の村落について姓の構成比率(表2.1, p.80)を示し、主要宗族すなわち最多姓の宗族の占める比率により、単姓村落、主姓村落、多姓村落に分類している。しかしながらここで示された比率は、村落によって人口と戸数が混用されているため各類型の比率については明言されていない。
- 10) 各集落の形成過程については文献などに著されることはほとんどなく、専ら口碑によるものである。以下、3集落の宗族の構成(ただし、下沈式の中庭の数)と成立過程についての聴取内容を記す。
- ◆淳化(陝西省淳化県十里原郷梁家庄村)
任150、王2、梁1、羅1、魏1、劉1、陳1、仙1、郭1、馬1(計160坑)

1991年夏の調査で王克祥村長にインタビューし、帰国後、不明な点を書簡で質問したところ、翌92年5月に王村長より同村の歴史をまとめた下記の書簡が届く。()内および下線は筆者による。

「村の歴史・災害などについては、見るべき詳細な資料は残っておらず、以下は90歳を越える任悦才老人談による。村は紀元前140年以前に創られた。その旧址は同村の北東にある。前漢武帝(B.C.141~87)が(村の北東15kmにある)梁武帝村を避暑に訪れ高家の娘勾銭夫人を娶り、本村で嫁入り道具を陰干し(嫁嫁妝・リツツ・ト・フツ)したことに因み、村名を嫁嫁妝と呼んだ。その後、年代が降りいつしか同音の梁家庄(リツツ・ト・フツ)へと変わった。1583年(明・万暦11年)に現在の村への移住が始まり、劉姓の一族によって城壁(図-4.1のA区正街里の西)が築かれた。当時、劉、魏、任の3姓が住み、正街里西端の城門東側に“出入相友”、西側に“劉・魏・任”と刻す。1650年(清・順治7年)劉姓の人口が激減したことから村の東北約1華里(500m)にある劉家堡(実際には真東約4km)へ移る。また魏姓についても残った数戸が村の東南(約1km)の魏家村へ移る。唯一残った任一族はひとつの血統からなり、その祖先は山西省運城縣人(書簡では“運”を“鄆”と誤る。ともに発音は1つ)で1530年(明・嘉靖29年)一夫婦が当地に移住する。二人はまず小花溝西岸に居を構え、三畝頂、小花山一帯を開墾する。その後、徐々に(A区の北に連接するU字形の)窑沿里と呼ばれる崖地に(靠崖式の)窑洞を穿ち、さらに城内へと移る。本村には元来、東門、南門、西門の3門(図-4.1参照)があったが北門はなく、これらの門は全て1949年の開放前に壊された。そのほか村内には、観音廟、関帝廟、戲楼、三義廟、葉王洞、山神廟、三教廟、雷神廟、雷神塔、洪福寺、無量廟など(図-4.1参照)清初の建造物があったが、1945年前後に壊された。」

◆靈宝(河南省靈宝県焦村郷西章村)

呂47、王12、張9、賀8、梁1、金1、楊1、段1、董1、馮1、權1、史1、馬1、孫1(計86坑)

1991年7月の調査時の不明な点、特に村の歴史について靈宝県建築学会秘書長焦民社氏および村民呂秋照氏より書簡が届く。以下は主に焦氏からの書簡に基づく。

「西章村は靈宝県城の西約5kmに位置し、南に隴海鉄道、北は洛潼公路に接し、地勢は北高南低である。西章村の歴史については文字の記載はない。西章村の起源は明朝にまで遡る。伝えるところによれば、明末、山西省洪洞縣に呂姓の一族がおり、戦乱を逃れて南遷した。その際族人は何処へ行こうとも新たに村を建てるときは村名を“西章”とすることを約束し、今日に至る。聞くところによれば、近くの省(陝西、山西、河南)には“西章”を村名とすることが幾つかある。」

また呂氏によれば、洪洞縣の大槐樹(シナエンジュ)の下に住んでいた一族がこの地に移住し、最初は村名を“西張村”としたが、張姓を忌み避けて同音の西章村に変えたとの説もある。

◆洛陽(河南省洛陽市邙山郷冢頭村)

鄭29、張15、陳13、杜4、劉3、史2、韓2、郭1、朱1、何1、韋1(計72坑)

同村の人民公社時代(同村では公社制は1958年に成立し1984年3月2日に撤廃、翌日より郷村制へ移行)の旧書記陳福魁氏等によれば、冢頭村の歴史は漢代にまで遡ることが

できる。村名は、清代までは近くにある後漢第8代皇帝冲帝(145~146)の懷陵にちなんで懷陵鎮、中華民国になって冢頭、その後1938年(一説には1927年)から開放前までが幸福村、解放後再び冢頭にに戻る。

同村は現洛陽市街の北郊約6kmの丘陵地帯にあり、この丘陵地帯は後漢以降の歴代皇帝貴族が好んで陵墓を築いた場所である。「冢頭」とは、土盛りした陵墓の形状に由来するものと考えられる。同村周辺には鮮卑族の王朝である北魏の皇帝・高官の陵墓が分布し、同村に東隣して宣武帝(499~515)景陵があり、文10)11)によれば、宋・司馬光撰『資治通鑑』に、唐武德四年(621)二月、のちの唐太宗李世民が隋煬帝の家臣王世充を破り、邙山の南麓谷水に退却した王軍を宣武帝陵に登り望むとある。また同村周辺から出土した墓志石によれば、同村は北宋元豊年間(1078~1085)、宣武村と呼ばれていたという。

同村は陳、張、鄭、杜の4大宗族からなり、他の姓は外部からの移住者である。このうち杜姓および張姓は集落中央の地上家屋に住むものが多い。窑洞居住歴についてはかなり古く、「数百年前」といったような回答が多い。なお同村の北東2kmの水口村の下沈式住居の横穴の上部に「光緒二十年(1894)三月廿一日立 福祿壽 寿」と刻した篇額がみられ、これまでの調査で実見したものなかでは、明確な掘削年を印したのものとしては最古である。

- 11) 中国の華北地方では小路や横町を「胡同」と呼ぶが、淳化では「同」のかわりに「洞」を、靈宝では「洞」をあてている。両集落のこうした小路は、降雨時には雨水の通り道にもなるため、場所によっては元の地面から数mえぐられU字状を呈し、字体に現れるように、土や洞穴を身近に感ずる環境が形成されている。
- 12) 開削年が不明確なものについては、①清国時代(1912年以前)、②中華民国時代(1912~1949年)、③中華人民共和国成立(1949年)後のいずれかを住人に聴いた。①については、実際には「数百年前」というような回答があり、明代あるいはそれ以前の可能性もあるが、図-5ではこれらを清代として示した。
- 13) 例えば、文12)は、中国の都市(都城)に関する考古学的成果と文献にうかがえる方向観念によって都市の配置構造(布局、格局)を歴史的に解釈した論文であり、布局の訳注[2]において、「おそらく囲碁に由来する語で、全体を見通して計画的に配置する意」としている。なお、文13)によれば、囲碁の起源は古く紀元前三千年頃まで遡り、碁についての一節は論語、孟子にもみえるとしているとしている。
- 14) 例えば、文5)の図-4(淳化、靈宝、洛陽における下沈式窑洞住居の典型例)および図-15(固定型中庭空間における横穴の掘削状況の経年変化)を参照。また、窑洞に限らず、中国住宅、なかんずく北京の四合院住宅を代表とする北方系の住宅では、大門を南東隅に配することが指摘されている。なお、南東という方角については、文14)で、かつて、正定を中心とする北派の風水学説の影響を受けてきたとしている。
- 15) 任意の二つの中庭の敷地境界は、図-3.1において、それらを結ぶ線分の中点を通ると考えられる。ゆえに、図-3の方法に従えば、原点と座標平面上の点との中点を敷地境界を示す点とみなすことができる。この中点の集合は、座標平面上にあったもとの点の集合と相似の関係にある。ゆえに、図-3.2の座標平面上の点は、座標軸の縮尺を変換

(2倍)することにより、敷地境界を表す中点として捉えることができる。

- 16) 平陸の集落で、姓がわかっているのは図-11に示したグループBの3坑のみであり、2坑が杜姓、1坑が許姓である。グループAでは放棄されたものが3坑あり、グループBに比べ全体的に老朽化が著しいことが確認されている。

参考文献

- 1) Rudofsky, Bernard: ARCHITECTURE WITHOUT ARCHITECTS, Doubleday & Company, 1964 邦訳は 渡辺武信訳: 建築家なしの建築, 鹿島出版会(SD選書184), 1984年
- 2) Graf zu Castell, Wulf Diether.: CHINAFLUG, Atlantis-Verlag, 1938
- 3) Cressey, George B.: Land of the 500 million / A Geography of China, McGraw-Hill Book Company, 1964
- 4) 八代克彦ほか3名: 中国・窑洞住居の庭空間の類型に関する考察, 日本建築学会計画系論文報告集, 第434号, pp. 35~43, 1992年4月
- 5) 八代克彦ほか4名: 下沈式窑洞住居における中庭空間の物的な経年変化/窑洞住居の地域的特性に関する考察 その1, 日本建築学会計画系論文報告集, 第448号, pp. 59~69, 1993年6月
- 6) 青木志郎ほか: 民家集落の建築類型学的考察・中国黄河流域の窑洞式民家考察, (財)新住宅普及会・住宅建築研究所, 1988年
- 7) 王滬寧: 当代中国村落家族文化/对中国社会現代化的一项探索, 上海人民出版社, 1991年
- 8) 福武直: 中国村落の社会生活, 1947年, (福武直著作集第10巻, 東京大学出版会, 1976年に所収)
- 9) 仁井田陞: 中国の農村家族, 東京大学出版会, 1952年
- 10) 徐金星, 黄明蘭主編: 洛陽市文物志, 洛陽市文化局, 1985年
- 11) 黄明蘭: 北魏洛陽景陵位置的確定和静陵位置的推測, 文物, 1978年第7期
- 12) 楊寬, 西嶋定生監訳, 尾形勇・高木智見共訳: 中国都城の起源と発展, 学生社, 1987年
- 13) 日本棋院編: 囲碁史展, 1968年
- 14) 劉敦楨: 中国住宅概説, pp. 39~41, 建築工程出版社, 1957年 邦訳に、田中淡・沢谷昭次訳: 中国の住宅, pp. 114~123, 鹿島出版会(SD選書109), 1976年

(1993年5月10日原稿受理, 1993年10月18日採用決定)